

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2018」 入賞作品

目 次

★優秀賞

| | | |
|---------------------|-----------------|---|
| 日本女子大学 文学部日本文学科 | 本間雅恵 | 2 |
| 福岡県立修猷館高等学校 全日制 | 添田天駿 | 2 |
| 熊本大学 文学部文学科 | 後藤翔 | 3 |
| 伊藤忠商事株式会社 | 宮地大輝 | 4 |
| 獨協大学 経済学部 | 今村奈津子 | 5 |
| 法政大学 法学部 | 中塚咲希 | 6 |
| 関東国際高等学校 外国語科中国語コース | 井内英人 | 7 |
| 創価大学 文学部人間学科 | 玉川直美 | 8 |
| 愛知国際学院 非常勤講師 | 山本佳代 | 8 |
| 私立教賀気比高等学校 普通科 | 斉藤もも | 9 |

★入賞

| | | |
|---------------------|-----------------|----|
| 長崎県立大学 地域創造学部公共政策学科 | 森井宏 | 11 |
| 神戸女学院 高等学部 | 田中陽帆 | 11 |
| 鮮文大学 中語中国学科 | 大久保紗文 | 12 |
| 横浜市立大学 国際総合科学部 | 山本蘭 | 13 |
| 山口県立防府商工高等学校 情報処理科 | 種田涼音 | 14 |
| 首都大学東京 都市政策学部 法学系 | 矢野紗耶伽 | 15 |
| フリーランサー | 西奎太郎 | 16 |
| 獨協大学 国際教養学部言語文化学科 | 大木麻由 | 17 |
| 獨協大学 法学部 | 池田修一 | 18 |
| 国際交流基金 日本語パートナーズ | 山本勝克 | 18 |

★優秀賞

届いた声

本間雅恵

「知らないことは怖い事」そう感じたことあるだろうか？ 私には、それを実感したきっかけとなった忘れられない一つの言葉がある。「私たちは平和な時代に被害を受けたのです。賠償するのは当たり前のことです。当時化学兵器を製造していた人には賠償金を支払ったのに、被害者である私たちには賠償しない。私たちは人間ではないのでしょうか？」

これは、私が高校生の時の先生に教えていただいた『ハルピンからの声』というドキュメンタリーの中に登場していた言葉だ。これは、第二次世界大戦の時に日本が中国に残してきた「遺棄兵器」による被害を受けた人たちに焦点を当てて作成されたものだ。終戦から今年で73年がたつ。それなのに今もなお当時の影響で被害を受けている人がいる、しかも日本は賠償金の支払いを拒否しているという事実は平和な環境で過ごしていた私にとって、あまりに衝撃的なことだった。しかし何よりショックだったのは、自分がこの出来事に関してあまりに何も知らないということだった。日本史の授業などで戦争について扱うこともあった。しかし、知っていたのは日本がアメリカからの空襲や原爆によって大きな被害を受けたこと、老若男女問わずたくさんの方が亡くなったことだった。また、日本も中国をはじめとする対戦国に対し、残虐な手段をとったということも知ってはいたが、抽象的かつ簡単な概要だけしか知らなかった。詳しく習ったのは日本が受けた被害史についてであり、具体的にどのように誰に対して何をしたのかなど加害者としての戦争を私は何も知らなかった。ましてや、今もなお被害を生んでいることなど、想像もしていなかった。小さい時から慣れ親しみ、私にとっては家族も暮らしている国でありながら知らなかった自分に恥ずかしさを覚えた。

日本は世界的に見ても平和な国だといわれている。実際、戦争もなく絶対的貧困といわれる状況も起きていない。日本では、戦争は過去のものであり、忘れてはいけない歴史として刻まれている。確かに歴史は忘れてはいけないのかもしれない。しかし、今も苦しむ人たちがいることを忘れてしまっている、あるいは存在を無視してしまっているように感じる。自分たちのしてしまったことに目をつむり、平和だと思いながら過ごしている自分に嫌気がさした。それと同時に湧き上がってきたのは、このままではいけないという使命感に似た感情だった。

よく聞く言葉に「相手を知ることからすべてが始まる」というものがある。日本でよく聞く中国のイメージを考えてみると、マナーが悪い、うるさいなどの悪いイメージが多い。しかしそこに、私が実際に現地で感じたことを加えてみる。出会った人たちのことを想像してみる。日本の文化が大好きだといっていた女の子、子供を叱る親、孫思いの優しい年配の人、家族団らんの風景を見てほほ笑む店員。日本で見える景色と何ら変わらないことに気付く。こうして少し立場を変えるだけで簡単に見える世界が広がるのだ。戦争についても同じことがいえると思う。あの戦争において一方的に被害を受けたわけではないことは想像がつく。日本が誰に対し、どんな理由で、何をしたのか。その歴史的事実を多角的に知る必要があるのだと思う。あのドキュメンタリーから聞こえてきた怒りの声の底には深い悲しみや憤りが感じられた。私にはその声は日本人がその事実を無視し、知ろうとしていないことに対しての嘆きの声に聞こえた。

日本と中国の交友の歴史は長い。過去に起きてしまった歴史を変えることはできないが、過去の出来事が持つ意味を修正することはできるはずだ。届いた声は無視するのではなく、互いの心の声に耳を傾け、聞こうとすること。相手を理解し、知ろうとすること。そしてそれらを共有し、彼らの悲しみの声に対し誠意をもって答えていくことが必要なのだ。怒りの声ではなく、親しみの声がいつの日か響くように。

夢の原点

添田天駿

「友達から、おまえは日本人だよ…と言われたよ、お母さん、どうして？」
これは、私が母と兄と中国の武漢に住んで、幼稚園に通っていた時の出来事。

困惑している私の顔を見て、母は、こう言った、「あなたは、生まれた国が日本だから…」中国人の母は、自分の祖国の文化を覚えてもらうために、幼い私と兄を中国へ連れ、普通の中国人と同じように、中国の幼稚園を通わせ、周りの子供達と馴染ませるために、私に日本人であることを一度も口にしなかった。

小学校の終り頃日本に戻った私は、一見ほかの日本人の子供たちと同じく、学校生活を始まり、仲間を作り、勉強や部活に励んでいた。しかし、自分の中では、周囲の仲間との違いを少し感じた。何故なら、心の底には、いつももう一つの祖国—中国の面影があったからだ。

日本で家族と静かにお正月を過ごす時、何故か、いつも中国の旧正月に仲間たちと一斉に花火や爆竹で賑わうことを思い出す。真冬の中、胸は熱くなる…あの頃、周りの仲間と同じく、極当たり前のことのように思っていたのに、いまになって、何故か、あの頃より、中国の節分、伝統と深い人情を切に思うようになり、恋しくなってきた。

2011年3月、日本で死傷者数万人となる東日本大震災があった。私は、様々な募金活動にふれる時、何故か、いつも中国の四川大地震のことを思い出す。あの頃、私は七歳、ちょっと中国の小学校を通っていたので、震災後、学校の募金活動にすぐ参加し、クラスメイト達と一緒に、真っ赤な「四川大地震救災」の旗を挙げて、武漢市の中心部にある、最も賑わう商店街で、募金箱を持って走り回った。

「良い子、良い子、よく頑張っているね」

買い物で賑わう大勢の人から、ひとりのおばあちゃんがやってきて、小さな両手で抱っこしている私の募金箱に、数枚の百元札を入れながら、微笑んで私の頭を撫でてくれた。そのおばあちゃんは、私は日本人であることを当然知らなかった。私は、惜しまずにお金を差出したおばあちゃんに感謝すべきなのに、返って励ましの褒め言葉を頂いたことに、胸がいっぱいとなり、十数億人の間、愛情を一人から一人へ伝わっていくこの雄大な中国大陸に、感動を覚えた。

母の思う以上に、母の祖国の中国は、私の歩みの原点となった。

しかし、私に影響を与えたのは母だけではない。私の成長に連れ、日本グローバル事業展開のため、世界中に飛び回って多忙の父親との交わりも自然に増えてきた。電機メーカーに務める父は、中学生になった私と兄を良く科学技術館や展示会などへ連れて行き、日本の先端技術に触れる機会を与えてくれた。そこで、私は、製造や介護などのロボットに魅了され、ロボット開発の夢を持つようになった。

夢を語る私に、「いまの時代はグローバル時代だ、最先端の技術を学ぼうとしたら、アメリカへ行って来い！」と、父の一言に、私は昨年、日本高校の交換留学生の一人として、アメリカを訪れ、そこで一年を過ごした。

そして、交換留学先のアメリカでロボット大会に優勝した時、こんな質問がされた。

「将来の夢は、何ですか？」

「最先端のロボットをつくって、中国、日本、世界中の救済活動に使いたい」と答えるたびに、中国の原点に回帰したような気がする。あの募金箱を抱いた小さな男の子の頭を撫でてくれたおばあちゃんの微笑みは、目の前に浮かんできて、胸が熱くなる。中国大陸に覚えたその感動を、私が創ったロボットを通して、日本、そして世界へ伝えていきたい。

「あなたは、なに人ですか？」

「アジア人です」—私のいつもの答えだった。

この遠くの国から、生れた日本と、幼い心に深い人情を注いでくれた中国は、一つの故郷に見えたのだ。

「未知とものさし」

後藤翔

「無理！絶対美味しくないじゃん！」

目の前の食べ物を前にして私は必死に頭を振った。二年前に訪れた中国の王府井の裏小路の露店街で「それら」を前にしてげんなりした。褐色の体軀に固く光沢のある殻、串団子のように連ねられて店頭に並べられたサソリと、強烈なすえた臭いを放ち、食欲よりも逃走本能を刺激される臭豆腐。日本にはない「異物」だ。普段食べるものとは形も違う。きつと舌に合わない。

「食べてみろって！すごく美味しいから。せっかく中国に来たんだし挑戦しなきゃ」

私の躊躇いをよそに友人は横で意地の悪そうに笑いながら私の背中を押す「どうせ無理、

多分一口目でギブアップだ。食べられる訳がない」そう思いながら、私は恐る恐るサソリ串を口に運んだ――。

元々中国研修に乗り気ではなかった。毎日のようにメディアでは外交や反日の問題が取り上げられ、良いイメージを持っていなかったからだ。「どうせ日本人に冷たいし、居心地もきつと悪い」と、直前まで悩んだ。しかし悩み抜いた先にあったのは私の価値観を180度変える貴重な体験だった。

「日中関係は良くなっているが、まだまだ改善の余地があるよ。だからこそこういう場での活発な意見交換が必要だ。君の意見を聞かせてほしい」

研修の一環で訪れた中国の大学で、私とそう年も変わらない中国人の学生が拙い日本語で私にそう伝えてくれた。屈託のない笑顔と、聡明そうな目元が印象的な人だった。

中国は日本より学歴社会の色が強い事に加え、大学のレベルが高いため進学することが非常に難しい。彼も血の滲むような勉強をしてこの大学に入学したと言う。私は彼に「本当に立派だ」と素直な感想を述べた。照れくさそうに笑いながら彼は「普通だよ」とトーンを変えずに言う。「まだまだだ。もっと勉強してやりたいことを将来したいんだ。」静かに、しかし確かに燃えるような熱意を感じさせる彼の言葉。私は身震いした。利発で謙虚、加えて野心家。これほどの大学生が今の日本にどれほど居るのだろう、と思案した。

一日の終りに彼は「日中の将来を背負うのは僕たちだ。僕らのような若者が歩み寄ることが良好な日中関係の第一歩だ」と私に言った。真っ直ぐなその眼差しは、私が勝手に独りよがりなイメージで抱いていた中国人像とは真逆だった。

結局私は「知らなかった」のだと思った。彼のような中国人の存在を。周囲の作り上げた幻影に縋って、決めつけて、遠ざけていた。「どうせ」「きつと」と関わったこともないのにレッテルを貼った。使う言語が違うだけで、文化が異なるだけで。それだけのことで関わろうとしなかった。

中国研修で泊まったホテルのスタッフも、寝台列車の乗客も、王府井の露店商も、誰も私達日本人を邪険に扱わなかった。寧ろ「日本から来たの。遠いところから大変だったでしょう」と歓迎してくれた。そこに私の想像上の「中国人」などいなかった。知りもせず、経験もせず、偏見だけで敬遠していただけだった。

――口の中でサソリの殻が弾ける。腹わたの苦味と、シンプルに味付けされた塩味の塩梅が丁度良く、絶妙な味だ。そして私は臭豆腐を口に入れる。強い匂いとは裏腹に味噌ベースで味付けされた厚揚げのような豆腐が口の中でじゅわじゅわと崩れる。一口食べると臭いは気にならなくなり、むしろいいアクセントになった。

「なにこれ。すごく美味しい！」

驚きと喜びが混じった心の声の口から漏れた。気づけばあつという間に平らげてしまっていた。

異形、異臭、未知、未体験。「知らない」から食べたくないし、触れたくない。知ってしまったえば、体験してしまえば見えるものが広がる。世界はがらりと変わる。少しの勇気ときっかけで、今までの価値観はひっくり返る。

私は筆を置いて、私のものさしを変えたあの一週間を思い出す。聡明な彼は今何をしているだろう。王府井に行くのも良い。雑然としたあの裏小路にサソリと臭豆腐はまだ売ってあるだろうか。

シャレから始まる私と中国

宮地大輝

小学生の頃、クラスでダジャレが流行った時期がある。私のクラスでは、日常的にふとんがふっとんだのはもちろん、全校集会での校長先生はゼッコーチョーであった。そんなダジャレセンスの高い(?)私のクラスにとっておきのダジャレの一つには「チャイナにいったいな」、なんてのもあった。クラスメイトの一人が、親の転勤の影響で北京に引っ越すなんて奇跡的なことがあった日には、みんなこぞとばかりにチャイナにいったいな、と面白おかしく彼を送り出した。面白くてクラスの人気者だった彼が最後の挨拶で「中国はちゅっごく広い」なんて言うものだから、クラスは大盛り上がり。とてもとても楽しかったそんな日々は、私が初めて中国、という国を知った瞬間だった。(同時にチャイナという英単語も覚えた。)当時の私にとって、中国は「チャイナにいったいな」、というくらいだから、日本からどこか遠い国、というイメージに過ぎなかった。

時は流れ、社会人。私はペンキや接着剤、プラスチックの原料を取り扱う貿易会社に入社をし、中国との取引を行う部署に配属された。世界を舞台にビジネスを展開できることに魅力を感じ、入社を決めたが、元々中国とのやり取りを希望していたわけでもなく、入社後は、ただなんとなく配属された部署で与えられた仕事を淡々とこなしていた。仕事にやりがいを見出せず、面白みのない毎日を過ごしていた私が、中国に初めて足を運ぶことになったきっかけは意外にも、あの、小学生の頃のクラスメイトだった。同窓会で再開した彼は、北京に数年住んだ後、上海へ移動。上海の大学を卒業し、日本で就職をしていた。お酒を飲みながら彼の長い中国生活の話に聞き入る。小学生時代の懐かしさに彼のユーモラスな性格も相まって、中国の話聞くのはとても楽しかった。楽しそうに聞き入る私が「上海に友人がいるから、行ってみたらどうか」と提案されるまで、そう時間はかからなかった。リアル「チャイナにいったいな」だと思いつつも、お酒の酔いと再会の喜びの勢いで、訪中を決めた。

初めて行った上海では、高層ビルや夜景、地下鉄トンネル内の広告、スマートフォン決済、発展している街に衝撃を受けた。これが中国か。自分が取引を行っている国はこんなにも発展している国なのか。私が携わった商品はこの町のどこかに使われているのか。そう思うと何となく嬉しくなった。親切なクラスメイトの友人の上海人のおかげもあり、初めての中国旅行は楽しいものとなった。

それから約1か月後、出張でも訪中の機会が与えられた。化学品の取引を行う私は、中国の山奥の工場訪問をすることになった。上海ですっかり中国に対するイメージが定着していた私は、二度目の訪中を楽しみにしていた。しかし、そこで目にする光景は上海のそれとはうってかわったものであった。工場までは鉄道と車を乗り継ぎ、大連から半日かけて行くのだが、その途中の未舗装の道、不衛生なトイレ、道端に座る泥まみれの子供たち。中国には、貧しくて、衛生的な環境やインフラが整っていない地域がまだまだあることを思い知らされた。私は中国のことを全然知らない、そう思われた瞬間だった。発展した部分だけを見て、中国は発展している国だ、と思い込んでいた。格差社会の現実を目の当たりにし、愕然とした。同時にもっとこの国の貧しい人たちの助けになりたい、という思いが生まれた。幸い、仕事上のパイプはある。自分が仕事を頑張れば頑張るほど、間接的にでも、微力ながら中国の人たちに貢献できる、そう思うようになった。それからというもの、中国との取引を毎日行う私はやりがいを持って仕事に臨むようになった。1年前から始めた中国語の学習もとても楽しい。

日々の大半を占める仕事にやりがいを見出せたのは、中国のおかげだ。「チャイナにいったいな」と言われたら今では間違いなくこう言う。「喜んで！」

日本人という仮面

今村奈津子

私は岐阜県で生まれ群馬県で育った、生粋の日本人だ。いわゆる外国人との出会いは学校の英語の先生のみ。そんな環境で15歳まで育った私が通うことになった高校には、中国人が何人かいた。そんな些細な変化だが、どこからどう見ても日本人な人間しか周りにいなかった私にとっては、カルチャーショックになった。王さん、趙さん…そう先生から呼ばれるクラスメイトは、正直に言うとまるで宇宙人のように感じた。私とはまるで違う人たちなのだろうなあと考え、日本人の名前をしている友人を作った。

しばらくのち、友人を介して一人の女の子と知り合った。その女の子は親が中国人で、中国の名前を持っていた。どんな話をすれば良いのだろう。そう思った私の不安はすぐに打ち砕かれた。授業の話、先生の話、好きな漫画の話ですぐに打ち解けることができたからだ。彼女は中国で育ち、中国の名前を持っただけの、私と同じ一人の女の子だった。私は勝手に日本人の仮面をつけ、相手に中国人の仮面を押し付けて違う生き物として生活していたことを知った。その女の子とは、毎日のように一緒に帰る大親友になった。

今思えば、私は中国が苦手だったのだと思う。中国に対するネガティブな報道を耳にして、中国人は日本人が嫌いで、日本人も嫌いというイメージが何となく頭の中に存在したし、街中で飛び交う中国語は威圧感があって怖かった。しかしそれは中国が、ではなく「よく知らない存在である」中国が、苦手だったのだろう。中国語を学ぶうちに、ふわふわと話しても意味が伝わる日本語と違って、はっきりと発音しなければ伝わらない言語だったのだとわかり、自分が威圧感だと思っていたものの正体を知った。さらに中国のことを知る

うちに、政治的・歴史的な考え方も知った。そして徐々に私の中にあった苦手意識は解消されていった。

目の前の人間が一人の人間に過ぎないことを知ることは、外国人と交流する上で重要なことなのではないかと思う。私たちは、日本人と話すときは「私とあなた」という関係で話ができるのに、外国の人と話すときは知らず知らずのうちに「日本人の私と〇〇人のあなた」として接してはいないだろうか。確かにどんな国で育ったかは個人の人格形成に多大な影響を与えるが、一様に同じ性格なわけではない。〇〇人だから私とは違う生き物なのだろうと決めてかかることはもったいないことだと思う。

国、つまり政府間の話に絞れば、本当の意味で国同士が友人関係になることは非常に難しいことだと思う。私たちを代表して国という仮面をつけ会議の場に立つ人たちは、まず国益を考え行動する。目の前の相手は国益を損なわせている相手か、そうでないかで国にとっての友人かそうではないかが決まってしまう。特に日中間の政治的なすれ違いは領土問題や歴史的背景からも見えるように、短期間で解決できるものではないように見える。しかしその仮面は私たち個人のやり取りにおいて、本当に必要なものなのだろうか。わたしは日本人だから、歴史的に軋轢のある国の人とは何となく話しづらい。なんとなく嫌いな気がする。そんな風に考えるのは簡単ではあるが、もったいないと思う。今やどんな国同士でも、どこかで結びつきがある社会になった。そんな今だからこそ国という仮面を脱いで一人のひととひととの付き合いをしてみたいと思う。

あの時、話しかけてくれてありがとう

中塚咲希

私の悪い癖。それは人を見ただ目で判断する時があること。街に少し怖そうな人がいたら何となく避けて通ろうとするし、電車の中に宴会帰りのサラリーマンがいたら少し距離をとってしまう。そして、この日もそうだった。携帯の画面を見つめて困っている男性がひとり、電車の券売機の前に立っていた。少し離れた場所から見ても日本人ではないことは明らかだった。日本語以外の言語を話すことができない私は、彼を助けてあげることができないから声をかけるのはやめておこうと思い、歩くスピードを少しだけ速めた。しかし、嫌な予感は的中した。

「すみません、この場所に行きたいのですが。どうすればいいですか？」

彼は一枚の写真を提示しながら片言の日本語でそう話しかけてきた。ああなんでまた私…。半ばそんな気持ちだったが、そこは有名な観光スポットで、それがどこだかすぐに分かった。しかし、道のりを言葉で伝えるにはあまりにも難しすぎたため、最寄り駅までの切符を買ってあげた後、途中まで同行することにした。第二外国語の中国語の授業で習った、決して使うことはないだろうと思って記憶の片隅に眠らせていた単語を必死に呼び覚まして、スマートフォンの翻訳アプリに助けを求めながらも、電車の中ではたくさんのお話をした。彼は中国人で日本へは桜を見に来たこと、いつか日本で働きたいと思っていること、私が中国旅行の際に訪れたことがある観光スポットの近くが彼の地元であったことも分かった。こんなことならもっとまじめに授業を受けておくべきだった、まさか役に立つ日がくるとは思いもしなかった、と後悔しているうちにあっという間に彼との別れの時になった。人助けをした、そんな気は一切なかったから、彼が無事にたどり着くことができたかという不安な気持ちは一晩寝たら忘れていた。

数日後、私の携帯に見慣れない名前から「画像を送信しました」の文字と1件のメッセージが届いていた。開いてみると、そこには満開の桜の写真と、「今日帰国します、ありがとうございます。日本がもっと大好きになりました。」の文字があった。送り主はあの時の中国人だった。確かに何かあったら連絡して、と連絡先を教えたがまさかわざわざお礼を言ってくれるとは想定外だった。「人は見かけによらない一面を持っている」よく耳にする言葉だが、まさにこのことだと思った。実際に交流してみたらイメージとは全く違って、とても優しい心を持っていた。私は言語の壁を超えてうまくコミュニケーションできなかった、最後まで案内することも、彼の言葉を理解できないことも何度もあった。まして、道案内を快く受け入れたわけではなかったのに。それなのに彼は感謝を伝えてくれた、些細なことかもしれないが、私にはその気持ちがとてもうれしかった。もし自分が反対の立場なら、もちろん感謝はするが、もう一生会う事はないであろう相手に対して実際に行動することはないと思う。

多くの人メディアによる中国へのイメージに縛られて、日本への観光客に対しても偏見の目で見ると。マナーを守れていない方に対して、これだから中国人はと決めつける。自分が海外に行ったら完璧にその国のマナーを守ることができているか保証できるはずもないのに。私も最初はそんな多数派の一人だった。でも今は違うとはっきり言う事ができる。この出来事があって中国語の勉強を始めた。また道を聞かれた時のために、その時はきちんと会話ができるように。

隣同士の国、これからの世界経済を牽引していくであろう日本と中国。これからどんな関係になっていくだろうか。よきライバルであり、最高の仲間である、そんな関係を築いていけるだろうか。両国の未来がああ時に彼が見た満開の桜のように美しいものでありますように。

心のバリアフリー

井内英人

昨年のちょうど今頃の出来事である。「俺、中国に帰りたい！」泣きながら訴える僕に、母は、困るというより、不思議そうな顔をしていたのを覚えている。その理由は、こうだ。2014年から2017年にかけて、丸三年間、父の仕事の都合で、母と弟とともに上海で暮らした。出身は東京、国籍は日本、両親も日本人、それまで中国とは全く縁のなかった僕が、中国に「行きたい」ではなく、中国を我が故郷のように想い「帰りたい」という言葉を発したことに驚いたらしい。ただ、僕としては、「帰りたい」という言葉は、何か考えがあったわけではなく、純粋に、自然に出てきた言葉だった。あの頃は、帰国直後で日本での中学校生活に慣れるのに必死で、また高校入試のことなどもあって、確かに、精神的に少し不安定だったのかもしれない。しかし、一年経った今でもはっきり言えるのは、僕の心の故郷は中国であり、この想いをいつまでも大切に抱いていきたい、そんなことを思わせてくれる中国での生活があった。

父の赴任が決まった当時、日本人学校に隣接するマンションで暮らすことが決まり、そこから歩いて通学する予定だった。しかし、学校との面談の結果、弟は合格、僕は不合格となってしまった。理由は、僕の身体障がいのためだった。日本では皆と同じく普通学級で過ごしていたので、僕も両親も何の問題もなく編入できると思っていたが、そうではなかった。高層マンションの眼下に広がる日本人学校を眺めながら、ここは日本ではなく中国だから仕方ないと自分に言い聞かせた。

ところが、そんな僕たちが通うことになったのは、なんと上海市立の現地校だった。王校長先生から「義務教育だから、明日からでもいっしょい」と言っていたのだ。もちろん、障がいのことなど問われなかった。授業も全部中国語で、当初、先生が何を言っているのかさっぱりわからなかったが、何もかもが初めての事だらけで、刺激的で、毎日ワクワクした。何より、予想に反して、皆が好意的だった。困っていると皆がわっと集まって色々助けてくれて、それが少し恥ずかしく、でも、とても有難かった。すまなそうに礼を言うと「没事、没事！」と明るく返事をしてくれて、今、思うと、僕の上海での学生生活は、このような日々のささやかな出来事の中で、勇気と元気をもらって支えられていたのではないかとあらためて感じる。もちろん、家族ぐるみで付き合えるような友人もできた。また、学校生活だけでなく、地下鉄やバスでも、よく席を譲ってもらった。それに気付かないでいると、服の裾を引っ張ってまでして、座れと教えてくれた。そして、時には、「もっと豆を食べなさい」とか、こちらがもう勘弁してくれと思うほど、大きな声であれこれアドバイスをしてくれたりした。日本では席を譲られた経験などなく、まして、見知らぬ人が、僕の身体を心配して食事のアドバイスをしてくれることはまず無いわけで、上海でのこの出来事には、今でも時々思い出しては笑ってしまう。

中国の中でも、上海は、世界有数の大都市であり、道路や歩道も整備され、地下鉄にもエレベーターやホームドアが設置されていて、僕からみても、バリアフリー化は進んでいると感じた。しかし、それ以上に思うのは、言葉がわからないとか、障がいがあるとか、そういったことに煩わされることなく、僕なりに充実した生活を送ることができたのは、中国人の心の中に、真のバリアフリーがあるからではないかと思う。

僕は、現在、日本の高校で中国語を学んでいる。今年の夏休みは、知人を訪ねて、北京でホームステイをする予定だ。僕がお願いしたところ、二つ返事で了解してくれた。即断即決なのも中国人の良い所だと思う。将来は、中国人の本質的な良さを分かってもらえるような仕事に就きたいと思っている。

中国語がつなげてくれた一期一会

玉川直美

「中国語がつなげてくれた一期一会」そう思った瞬間だった。あれは、高校2年生の10月、学校からの帰りで国分寺駅の改札を出て中央線に乗り換えようとした時だった。仕事帰りの人や学生がせっせと行き交う中、突然一人のおばあさんが不安そうな顔で私を呼び止めた。最初は何を言っているのかよく聞き取れなかったが、おばあさんの必死な目を見ながら、よく耳を澄まして聞いてみると、なんとそれは中国語だったのだ。ちょうどその頃、中国語を学んでみようと思って、ラジオの中国語講座を聞き始めて2か月くらい経っていた頃だった。おばあさんは手に握りしめていた紙を私に見せながら、「ここに行きたい」というようなことを言っていた。紙には「武蔵小金井」と書いてあり、自分も知っている駅で案内できると思い、「我知道这个车站。一起走吧！」と習いたての中国語で伝えたと、おばあさんはちょっと安心した顔つきになった。電車に乗っている時、おばあさんと色々話してみたかったが、質問したところで自分が聞き取れないのは申し訳ないと思い、何も話せなかった。せめてもの思いで「欢迎来到日本！」と伝えたと、おばあさんはにっこり微笑んでくれた。駅のホームに着いて看板の「武蔵小金井駅」の文字を見ると、おばあさんは今までの張りつめた感じは消え、ほっとした様子だった。人々の雑多な雰囲気も収まり、おばあさんの声がよく聞こえるようになると、ゆっくりした口調でなぜ日本に来たのかを話してくれた。おばあさんは福建省から来た人で、自分の娘が日本で結婚式をあげということで日本に来たそうだった。おばあさんの話を理解するまでに、何度も聞き直したり、筆談で書いてもらったりしたのでたどたどしいコミュニケーションになってしまったが、おばあさんは気にせず私が理解できるまで話してくれた。「恭喜恭喜！」と伝えたと、おばあさんはまたにっこり微笑んだ。そして、最後、私の手をぎゅっと握り、耳元で何かを言っていた。歌が好きというようなことを言っていたのかもしれない。その後、透き通る声で中国語の歌を少しだけ披露してくれたのだ。結局お互いの名前も知らず、一瞬の出会いだったが、中国語を始めた私にとって忘れられない出来事となった。この一期一会の出会いから学んだことがある。それは、「相手に何かを伝えたい、相手の言いたいことを理解したい」という「思い」があればコミュニケーションは取れるということだ。今までは、流暢に話したり、一度聞いただけで聞き取れるようにならないとコミュニケーションを取ることはできないと思っていたが、必ずしもそうではないのだと気づいた。おばあさんを案内した時も、なかなか聞き取れないこともあったが、おばあさんもしっかりと伝わるまで何度も言いなおしてくれたおかげでお互いコミュニケーションが取れたのだ。「思い」はまるでコミュニケーションの「入り口」を開ける「鍵」のようなもので、それがなければ何も始まらないものなのだった。それでも、もし自分の言いたいことがさっと言えたり、何でも聞き取れる中国語能力を持っていたら、おばあさんともっと話ができたとと思うと少し悔しかった。「高い言語能力」は一方で、コミュニケーションの「入り口」に入った後の道を案内してくれる「案内人」のようなものだった。「案内人」がいれば、道を恐れずに進むことができるし、スムーズに移動できる。また、コミュニケーションの「入り口」に入ることも自体にも躊躇しなくなる。このおばあさんとの出会いのあと、「もっと中国語を話せるようになりたい」と思い、学び続けて今に至る。まだまだ流暢には話せないが、「思い」からコミュニケーションは始まるということが心にあるので楽しく学ぶことができている。言葉は人の「思い」と「思い」をつなげてくれる橋—そう確信した出来事だった。

生まれて来る子供へ～新たな日中関係を目指して～

山本佳代

お腹の中に宿った新しい命。主人と結婚して2年目で授かった子であり、生命の神秘を感じる毎日だ。『生まれて来る子の名前は何にしようか？』____主人に尋ねると決まって帰って来る答えがある。『男だったら、「孔明」か「孟徳」がいい』諸葛亮孔明、曹操孟徳。三国志の英雄から名前をつけたいという。理由を尋ねると日本と中国の民間交流はますます活発になって行くし、中国語はますます重要で、中国語スピーチコンテストで日本チャンピオンを獲得させたという。その上で両

国にとって親しみを持ってもらいたい。名前負けする事ない、強い子に育て欲しいとの願があるようだ。

お互い中国語を学んでおり、日中のバイリンガルを育てる教育方針には完全に賛成だ。しかし、名前については些か慎重にならざるを得ないと思っている。訪日観光客増加に伴う、日中の交流は増えたにも関わらず、日本人の対中国感情は悪化しているからだ。中国にゆかりのある名前が理由でイジメを受けるのではないか。この不安を拭いさる事ができないでいる。

こう思う背景には私の過去が関係している。学生時代バイト先で「中国語を学んでいます」と自己紹介をすると、多くの人々に「何で中国語」と言われたからだ。英語と答えた友人は手放して賞賛され、何故といった思い出があるからだ。言語＝国家であり、その国のイメージフィルターと連動して見られたからだ。

今でこそ中国語人材は重宝されているが、昔は現在ほど重要視されていなかった。むしろ一昔前は中国に工場を持つ日本企業が現地で活動をする為の人材がほとんどで、製造業で職種は営業職しかなかった。今は日本に進出する中国企業や日本に来た中国人観光客に対応するサービス業と裾野が広がっている。中国の経済発展は新しいチャンスを与えてくれる。

今は日本語教師として仕事をしており、中国人留学生に接する機会がある。ここ数年で彼等のイメージはかなり変わった。それまでは都市部の学生が多かったが、所得水準の中間層が増えた影響か内陸部の学生が増えた。また、昔は良くも悪くも日本に来て、成功したいといった野心的な学生が多かったが、今は日本文化（主にアニメ）に惹かれて来たという学生がほとんどで、学習目的や意識に大きな変化がみられる。

彼等の多くは日本文化に理解を示しており、大きな文化摩擦は現場で起きていない。一方で日本人の意識はどうであろうか。未だに少し古い中国人像がまかり通ってないだろうか。ニーハオトイレや自転車で大爆走といった、昔の中国のイメージから脱却できず、スマホ決済する中国人は全体の一部分といった印象を持っているように思う。

多くの人々が『中国』と聞くと思考停止のスイッチが入るのか、理由はわからない。ただ難しい事を考える必要も、身構える必要もないと思う。機微に触れ、相手を読み取る日本文化が隣人の表情を読み間違えてはいけぬ。私達は離れる事のできない永遠の隣人なのだから。

変に日本とか中国を意識しない方が寧ろいいのかもしれない。主人はいつも中国人の友人達と楽しそうに食事をしており、白酒を飲んでペロペロになって帰って来る。毎回勘弁してほしいが、心の底から楽しんでるのだろう。「自分の友達に悪い人はひとりもない」が口癖で、何も考えていないようで、行動して身を持って体験してきた言葉だけに否定もできないでいる。

結論を言うと、生まれてくる子の名前はまだ決まっていない。日中関係に引けを取らない重要な夫婦関係の課題であり、ここで揉めたらその先の日中友好は程遠いと思う。ただ、中国が大好きな私達にとって、生まれて来る子には輝かしい日本と中国の未来を見せてあげたい。そう願うばかりだ。

私にとっての藤野先生

齋藤もも

中国の偉大な文学者・魯迅が日本に留学し医学を学んでいた頃、私の故郷である福井県出身の教師・藤野巖九郎と出会う。魯迅は後に自伝小説『藤野先生』にこう記した。

「わが師と仰ぐ人のなかで、かれはもっとも私を感激させ、もっとも私を励ましてくれたひとりだ」と。

私にとっての「藤野先生」は、間違いなく上海で出会ったあの人だろう。

高校に入学して間もない頃、選択科目希望調査用紙の中国語と書かれた欄に私は何気なく丸を付けた。今思えば、ここで私の運命は大きく動いたのだ。

あの頃の私は、それまで11年間続けてきたフィギュアスケートを辞め、夢中になれるものをなくし、ただ毎日無気力に過ごしていた。中国語の授業では、ただ促されるままに機械的な発音を繰り返す、先生の文法の説明をぼんやりと上の空で聞き流す毎日だった。赤点でなければいいという程度の意欲しかなかったので、テスト勉強などもまともにしたことなかった。

そんなある日の中国語の授業後、先生から「中国語学研修に参加してみない？」と声をかけられた。ただ「海外に行きたい」「刺激がほしい」という理由で、即決した私。しかし、この時もすでに、私は運命の波に背中を押されていたのだ。

上海での語学研修は未知との遭遇ばかり、目にするものすべてが新鮮で刺激的だった。街へ飛び出せば、私の想像をはるかに超える人、人、人の大群。車、車、車の洪水。あちらこちらで大声を張り上げているエネルギー溢る中国人のパワー。こんなにも毎日がワクワク楽しくて、高揚感を感じることはフィギュアスケートをしていた時にも感じられなかった。

そこで私は1人の中国人教師・田甜先生に出会った。

一緒に行った研修メンバーの中で、私の中国語力が一番低かった上、英語もさほど話せるわけではない。意思の疎通ができずに話の輪に入らず、いつも無口だった私が不憫に見えたのだろうか。彼女はいつも私のことを気にかけてくれ、根気よく笑顔で話しかけ続けてくれた。私は田甜先生から、他の誰よりも自分が特別に思われていることを実感していた。講義を筆記した魯迅のノートに、藤野先生は毎回書き切れていないところの補足や日本語の文法の間違いを指摘する添削を行った。その添削は、藤野先生が魯迅の授業を担当している間、ずっと続けられた。藤野先生がなんとしても魯迅に大成してほしいという思いで心血を注いで指導し続けたように、田甜先生は研修中、出来の悪い私をずっと励まし続けてくれたのだ。

研修最終日、返却されたノートを目にした途端、私は声を上げて泣いた。そこには頑張っ

て書いてくれた日本語で田甜先生からのメッセージがこう書かれていたのだ。

「あなたを教えることができ、私は幸せでした」

帰国後、私は意欲的に中国語を勉強し始め、スピーチコンテストや検定試験に次々と挑戦するようになった。授業にも一生懸命取り組み、テストではいつもクラストップの点数をとるようになった。田甜先生は私の中の「勇気」を呼び覚ましてくれたのだ。

高校卒業後は大学に進学し、より本格的に中国語を学ぶ予定でいる。そして、こんなにもすばらしい先生に巡り合わせてくれた中国に、いつか恩返しをしたいと思っている。

★入選

日中の絆-長崎と福建

森井宏典

長崎。ここは異国情緒あふれる和・華・蘭文化が開いた日本最西端の都市。長崎の街を見渡すと、鎖国時代の中でも、日本で唯一、海外に港が開かれ、さまざまな人や文化が行き交った名残を多く感じることができる。僕は、大学進学と共にこの長崎の地にやってきた。この地を選んだ理由は、中国への強い憧れからだ。高校三年生当時の僕は、進路に悩んでいた。中国について学びたい。ただその一心であった。しかし、当時の僕は英語が絶望的に苦手で、とても外国語学部に行けるような成績ではなかった。それでも、中国について学びたいという希望を諦めきれず、古くから中国との交流が深い長崎県の大学に進学することを決めた。大学への入学が決まると僕は、懸命に中国語の勉強に励んだ。中国語の先生の熱心な指導のおかげもあり、中国語だけではなく、中国の文化や歴史についても理解を深めていくことができた。さらに、大学の中国人留学生と交流に努め、多くのことを共に学んだ。

長崎は、第二次世界対戦時、広島に次いでプルトニウム原子爆弾「ファットマン」が落とされた被爆地でもある。僕は、中国人留学生と共に長崎の平和公園を訪れ、被爆体験者の講話を聞き留学生と共に平和について考えた。この原子爆弾は、多くの日本人を死に追いやった兵器である。しかし、それと共に、日本人に些細なことでもとがめられ、浦上刑務所に入れられた多くの中国人、朝鮮人も死に追いやった。人間はどうしても自分中心に考えてしまう。中国人留学生と共に学んだことにより、我々は被害者だけではないということ、改めて気づかされた。

僕は長崎に来てから、“長崎に居ながら中国を感じる”そんな場面を多く体験してきた。その中でも、長崎ランタンフェスティバルは特筆すべき長崎の一大イベントであろう。この祭りは、長崎新地中華街の人たちが春節を祝う行事として始めた。長崎の街は約1万5千もの中国ランタンで埋めつくされ、極彩色の灯で彩られる。中国雑伎団による変面ショーや、浙江婺劇団による演舞も楽しめ、日本にいながら中国を感じるができる。それはこのランタンフェスティバルの右に出るものはない。

長崎県は、日本の自治体の中でも特に日中交流に力を入れている県であるといえる。1972年9月の国交正常化から1ヶ月もたたないうちに、日本の地方自治体としては初めて、久保知事自らが団長となり、友好訪中団を派遣するなど、全国に先駆けて中国との交流を進めてきた。僕自身、長崎に来てから様々な日中交流事業に参加した。その中でも特に印象深いのが昨年9月に行われた「未来へつなぐ日中青少年交流事業」だ。僕はこの事業で、約1週間、北京・上海・福州を訪問し、中国人学生と交流をした。福州で、僕は一人の中国人大学生と「日本と中国がどうしたらよりよい友好関係を築いていけるのか」について、夜が明けるまで話し合った。その時、彼が言った言葉が今でも忘れられない。

「『国の交わりは民の相親しむに在り』両国の友好促進には、相手の国に対する親近感を高めることが何より大切である。相手の国に好感を持つには、まず相手の国のことを知らないといけない。私は日本語専攻で日本語を学んだことがある人、日本へ留学や旅行に行ったことがある人など多くの知り合いがいる。その中に、日本が嫌いな人はいない。同様に、中国語を学んだことがある人、中国に長く滞在したことがある人の中にも、中国が好きの人が圧倒的に多い。だから、日本と中国がよりよい友好関係を築いていくためには、相手のことをできるだけ多く学び、誤解と偏見を解消することが大切だ。」と。

日本と中国。両国は2000年以上の交流をもつ隣国であるが、互いの思いがうまく伝わらず、すれ違うことも少なくなかった。しかし、「国の交わりは民の相親しむに在り」というように、我々一人一人が直接親しく付き合いお互いのことを思いやることこそが大事なのだ。

30年の時を超えて

田中陽帆

4年前、祖母が当時小学6年生の私といとこ、そして母を伴って、深圳にいる中国人の友人呉さんを訪れた。呉さんと奥さんは祖母のことを「お母さん、お母さん」と呼び、とても暖かく私たちをもてなしてくれた。呉さんは、自分の職場や建築中の家を私たちに案内

してみせ、祖母は呉さんがとても立派になって、呉さん夫婦がとても幸せに暮らしていることを心底喜んでいた。

呉さん夫婦と祖母の出会いは、今から30年前の話になる。

私の祖母がまだ40歳位、私の母が20歳位だったころ、祖母は近くの大学の寮住まいの留学生に月に1度程度ホームビジットを提供するホストファミリーになるプログラムに申し込んだ。祖母が当初希望したのは、大学生だった母の英語の勉強によいだろうと、英語を母国語とする国の留学生だった。ところが、しばらくして大学側から紹介されたのは中国からの留学生。なんでも、英語を話す留学生は人気で大学から距離の近い家のホストファミリーに決まることが多く、当時まだ発展途上であった中国からの留学生は、ホストファミリーとのマッチングが成立しにくく、家が大学から遠くまだ留学生が決まっていなかった祖母に、一度あってみるだけでもあってほしいと、紹介が入ったのだ。これも何かのご縁と祖父母は、紹介された中国人留学生さんとあってみることにした。

それが全ての始まり。祖父母は結局その時紹介された国費留学生の呉さんのホストファミリーとなり、その奥さんが中国にいるというので、祖父母は保証人にもなり奥さんを日本によんできて、呉さんと同じ大学の呂さん、田さん、石さん、等々、気が付けばたくさんの中国人留学生が家に遊びにくるようになっていた。みんなそれぞれホストファミリーが別にいたのだが、お正月もホームビジットに呼んでもらわず一人で寮にいるというので、だったら呉さんと一緒に遊びにおいでと、小さい家に大勢の留学生を呼んでいったのだ。日本の生活で困ったことがあったら話を聞いたりもしていたそうだ。祖母曰く、大変だったけどとても楽しかったと。

もうあれから30年。みんな、日本の大学院を卒業後、中国に帰って会社を営んだり、国のお役人さんになったりしてとても偉くなっている。だけど、今でも出張で日本にいくと、「元気にはしていますか？」と年をとった祖母に電話をしてきてくれる。去年も今年もお正月に家族で祖母を訪ねてきてくれた人もいた。先日の豪雨の際にも、心配して連絡があったそうだ。この夏日本は特に暑いからと先週も祖母に連絡があった。

祖母は「もうこんなおばあさんだから、気にしなくていいよっていつも言っているんだけどね。それでも連絡してきてくれるんだねえ...」と、嬉しそうに話してくれる。

今や中国は世界で最も影響力のある国の一つ、世界を動かす国になっている。私達が海外へ行くと、ヨーロッパでも、アジアでも、ロシアでも、みんな「ニーハオ」と呼び掛けてくる。ロシアでは、露店でさえも「人民元」でお買い物ができるほどだった。そんな中国をつくりあげ、いま立派に国を支えている人たちは、昔日本で知り合ったただの一般人にすぎないホストマザーを、30年たった今でも「お母さん、お母さん」と慕いつづけ、心配してくれるとても義理人情に厚い人たちだ。彼らの祖母へのそんな暖かい気持ちは、孫の私にとっても嬉しく、彼らと祖母がお互いに築き上げてきた関係はとてもすばらしいものだと思う。年月とともに色あせるのではなくより深く確かになっていくような絆。私もお隣の国の人たちとそんな風につきあっていきたいと思う。メディアで見聞きするだけではお互いが近くて遠くなる。祖母とかつての中国人留学生達が築いた絆のバトンを私もリレーして受け継いでゆきたい。人と人としてお互いを理解しようと思いやることができ友情を、一人でも多くの中国の隣人と築いていきたいと願っている。

想いが人を繋ぐ。

大久保紗文

北国の雪景色が広がる晩12時、終電に乗って家に帰り駅で降りたその時、駅まで迎えに来た母から一本の電話。

「駅前のコンビニにいるんだけどそこまで来てくれる？中国人観光客が困っているから通訳してほしい。」

コンビニの中で中国人観光客2人に会い、私のつたない中国語で話を聞いてみると彼女たちは空港付近のホテルまで行く予定が電車の中で寝過ごしてしまい、私の住んでいる田舎の無人駅で降りてしまったのだ。そこで母と私はすぐに彼女たちを家に泊めてあげようと思った。知らない人の家に泊まるのは彼女たちにとって不安なはず。最初は緊張している様子だったが、すぐに打ち解けていった。彼女たちは次の日の朝6時には出発しないといけないとのことで、私たちはたったの6時間という短い出会いだった。

私たちは布団を敷いて川の字になって寝た。寝ると言ってもお互い気になることが多いので語りの時間が始まる。話をしていくと、彼女たちはインターネット上で北海道旅行をす

るために一緒に行く人を探す中で知り合った2人だった。彼女たちは共通の好きな日本のアニメ、アーティストがいる。私にとってはどんなに共通点があっても知らない人と旅行するなんてあり得ないし、恐れを感じる。でも、お互いを信頼して行動する彼女たちの姿は私を驚かせた。彼女たちの話を聞けば聞くほど日本に対する熱意が伝わってきたし、その語る姿はとても笑顔溢れていた。私はその姿を見てとても嬉しかった。

私は4年前から夢ノートというものを書き続けている。小さな夢から大きな夢までひたすら書くのだが、そのたくさんの夢の中の1つが中国人の友達を我が家に招待する！だ。理由は私が中国留学をした際に中国の学生が温かく迎えてくれた。中国の友達が日本に来たら私も同じように迎え入れてあげたいし、恩返しをしたい！私にとって家とは、たとえ国籍が違って、言葉が通じなくとも家族の一員として感じることができる場所。そして彼女たちに私の家族を通して日本の文化を感じてほしいと思っていたからだ。今回このような運命的な出会いを通して私の夢までも叶えることができた。

彼女たちの中の1人がWeChatのモーメントに北海道での私たちの出会いを日記のように書き綴っていた。文頭にまず書かれていたのは、

“我真心希望中日可以永久的友好和平，便利店阿姨和大久保一家一辈子都能平安喜乐”

だった。この言葉を見た瞬間、胸に温かいものが込み上げてきた。この出会いが小さな一歩となり、友好関係の土台を築いていくのだと実感した。

冬休みが終わり、ハルビンに戻った今年3月、彼女たちから中国広州の特産物が実家に送られてきた。さらに私の留学しているハルビンにも送ってくれたのだ。彼女たちから、

「感謝の気持ちを伝えたい、だから受け取って欲しい。今度はあなたが広州に遊びに来てね。」

とWeChatで連絡が来た。私たち家族はその彼女たちの思いを受け取った。私は中国語の勉強をもっと努力し、次は私が日本のお土産を持って自ら彼女たちに会いに行く。今度会う時にはもっと成長した姿を見せたい！

現在、中国ハルビンでの2学期間の留学が終わり、日本に帰省した。日本はますます中国人観光客が増加しているのを感じる。道端で中国語が聞こえたら嬉しくなるし、バイト先でも中国人観光客が来るたびに、社員から「大久保さん、接客頼むね。」と言われる。異文化を理解し、その人が本当に困っていることに寄り添い、手助けしてあげること。同じ立場で生きていく者同士として協力し合うことの積み重ねが友好に繋がっていくと思う。想いが人と人とを繋ぐ。“想い”のキャッチボール。私の中国が大好きだという想い、彼女たちの日本に対する深い情、その想いが私たちを出会わせたに違いない。

私のもう1人のお姉ちゃん

山本 蘭

私には、2人の姉がいる。1人は血の繋がった3つ年上のお姉ちゃん。もう1人のお姉ちゃんは実の姉と同じくらい信頼し、尊敬している6つ年の離れた中国人である。

彼女との出会いは、私が高校2年生だったときまで遡る。地元の姉妹都市交流で、アメリカ合衆国からの大学生のホームステイの受け入れを1か月することになり、我が家に来たのが中国人の彼女だった。彼女は、中国からアメリカに留学をし、そこから短期留学で来日したという私の憧れるとてもグローバルな学生であった。それまで、私はいくつかの国際交流活動に参加し、ホームステイの受け入れも何度かしていたが、中国人と交流は初めてであった。メディアを媒介し私の頭には中国のネガティブなイメージが染みついていたので、正直中国人の彼女が我が家に来ると聞いた時はとても不安であった。しかし、約1か月間彼女と寝食を共にし、いつの間にか実の姉に言えなかったような悩みも相談していたり、語学がとても達者だった彼女に英語の宿題をサポートしてもらったり、逆に私が日本語の宿題を手伝ってあげたり、時には喧嘩をするなど実の姉妹のような関係になっていた。ホームステイの1か月はあっという間に去っていきお別れの時、正直に、中国人と聞いてとても不安だったことを彼女に打ち明けた。そうすると彼女は、「いろいろな情報に振り回されてしまうのは人間として当たり前だと思う。でもこれからいろんな国の人と出会うあなたにはどうか色眼鏡をかけないで、国や人種、宗教など関係なくその“人”と向き合っていてほしい」と温かいメッセージをくれた。

それから彼女は、行く先々の国から絵葉書を何枚も送ってくれた。そして文末に必ず

“I'm always be your side” いつもあなたの味方よ。あなたの姉より」と心強いメッセージをくれた。

それから3年経ち、私が大学2年生の冬、私は彼女に会いに中国を訪れた。いつかは行きたいと思っていた中国に、もう1人のお姉ちゃんに会う為だけに海を越えた。中国では、食事をしながら近況報告を1日かけてした。一緒にいる何気ない時間がとつても幸せで、やっとお姉ちゃんに会えたと心がいっぱいになった。彼女はせっかく中国まで来たのだからと万里の長城や、いくつかの歴史的な場所にも案内してくれた。中国の歴史などあまり知らなかった私に、まるで教科書を読み上げているかのように、わかりやすく詳しく教えてくれた。その歴史で、中国が世界の中でどんな立場だったか、どんなことが起こったのか、ひいきすることなく事実を伝えてくれた。どんなときも彼女の素直さを実感した。現地で、彼女の友達にも何人か会い、みんな温かく迎えてくれて、私はたった一度の訪問で中国が大好きになった。

現在まで私は、13か国以上の国と地域を訪れ、新しい価値観やモノ、ヒトと出会うことが人生の財産だと思うほど、国際交流が大好きになった。こんな私に、成長させてくれたのは紛れもなく彼女のおかげだと確信している。自分の中にあった、ネガティブな偏見や考え方を、否定することなく温かく理解し、向き合えるように導いてくれた。今、世界で人種や国との争いが絶えないが、私は彼女とのこの温かいストーリーで、国と国という大きな関係も1人1人の向きあい方も共通している部分があると思う。綺麗ごとかもしれないが、1人1人の考えが良い意味でも悪い意味でも影響し、そこから偏見や差別、対立を生んでしまうのだと思う。私もいつか国境を越えて、“I’m always be your side”とエールを送り、その人の新しい一歩のサポートや国と国とを友好的に繋げられる人になりたいと強く思う。これがわたしと中国のストーリーだ。

二胡を弾く天使

種田涼音

中学三年生の頃。吹奏楽部に所属していた私は、トロンボーンのリッスンを受ける為に山奥の合宿所に来ていました。休憩時間に気分転換のために外へ出てみると、遠くのほうから何やら不思議な音楽が聞こえてきました。その音楽の正体が気になって、音が聞こえる方へ足を進めていくと、そこには、見たことがない謎の弦楽器を演奏する男性と、その隣に寄り添うように座る女性の姿がありました。男性のほうはよく見ると中国の民族衣装を身に纏っています。夢か幻か、はたまた映画の撮影か何かか。謎の弦楽器が奏でる清らかでどこか切ない調べと、寄り添う二人の男女が織り成す美しい光景が、現実のものであるとはにわかに信じ難く、私は時間を忘れて、ただその光景を眺めていました。

「結局あの楽器は何だったのかな。」家に帰ってからもそのことで頭がいっぱいでした。演奏していた男性の恰好からして、おそらく中国の楽器ではないかと思い、インターネットで中国の楽器について調べてみると、私が見た楽器と同じ楽器を演奏している動画がありました。そして、その楽器の正体は「二胡」という中国の楽器であるということがわかりました。普段はオーケストラや吹奏楽など、西洋発祥の音楽にばかり触れていた私にとって、中国の楽器とは初めての出会いでした。そこから一気に中国の音楽の虜となり、それがきっかけで、今まで全く気に留めたこともなかった中国の文化や歴史、中国語に興味を持ち始めました。

もっと中国のことについて知りたいと思いつつもなかなか機会に恵まれず、そのまま高校へ進学した私に、大きなチャンスが訪れました。中国語の授業です。高校二年生の選択授業の中にありました。40人入ることができる教室の中に先生1人、生徒4人。非常に少ない人数でしたが、中国語だけでなく、文化、歴史、暮らしについてなど、様々なことを学ぶことができました。

ある日の授業のこと。先生が漢詩の「春暁」を中国語で紹介されたことがありました。春暁は、中学校の教科書にも載っているほど有名な漢詩です。私も中学生の頃に国語の授業で習いました。その時に、「漢詩は中国語で読むと本当の面白さがわかりますよ。」と国語の先生がおっしゃっていたのですが、私はその意味がいまいよくわかっていませんでした。「日本語で読んでも、中国語で読んでも、意味は同じなのに何が面白いのだろう。」そう思っていました。ですが、先生が中国語で春暁を読まれてはじめて気づいたのです。実はラップのように母音で韻を踏んでいたという事実！確かにこれは日本語で読んでいては気づくことができなかったでしょう。大げさかもしれませんが、私はそれに気づいた瞬間、自分の中の世界が大きく広がったような気がしました。「中国語って、なんて不思議

議で面白いのだろう！」 どんどん中国語の魅力に引き込まれていくのを実感した瞬間でした。

これまで中国に全く興味関心が無かった私が、ここまで中国について深く知ろうと思いはじめたのも、全てはあの時、二胡を演奏していた男性と女性のおかげだと思います。あの光景が現実だったのか幻だったのか、今でもよくわかりませんが、もしかするとあの二人は二胡を操り、私を中国の魅力へ引き込む天使だったのかもしれない。まだまだ中国について知りたいことが沢山あります。いつの日か、またあの天使の音楽を耳にすることを夢に見ながら、これからも中国についてもっともっと深く知っていきたいです。

中国が私にくれたエネルギー

矢野紗耶伽

「ねえ！そのスーツケース、どこで買ったの？」

初めて上海の地下鉄に乗った日の朝。私の背後にいた女性が突然話しかけてきた。

「その大きさは、何サイズ？」

まだ日本語モードから切り替えられていない脳に、不意に飛び込んできたネイティブの中国語。そもそも初対面の他人が、私に持ち物の詳細を尋ねている——その口ぶりはまるで久しぶりに再会した従姉妹のお姉さんのようだ。強烈なダブルパンチを受け、私は思考停止した。1年前の私は、こんな状況にさえ、たじろいでいた。一瞬の間が空いたあと、私はようやく思い出せた中国語「すみません」をぼそっと彼女に告げ、逃げるようにその場を去った。直後、自分に深く失望した。あかの他人だって同じ人間、喋る生きものだ。私は、こんなにコミュニケーション能力を欠いた機転の利かない人間だったのか。まるでロボットではないか。情けなさや悔しさで胸がいっぱいだった。しかし、それと同時に希望を感じたのも確かだった。あの時のできごとで、私は中国生活で学ぶことが山ほどあると確信したし、自分の成長への期待に胸が高鳴った。

それから、私は中国・上海で現地のエネルギーを日々吸収した。現地は自分の想像以上にIT化が発展しており、その生活様式はまるでSF映画かのように思えた。どんなサービスも存在し、スマートフォンさえあればかゆいところに手が届く。しかし、映画とは異なったのは、この一見無機質にも思えるほど快適なシステムが存在する中でも、人々がエネルギーを失うことなく、人間らしくいきいきと生活を送っていたことだ。私にとっては、それが何より印象的だった。一体あのパワーはどこから湧いているのか、興味津々だった。

中国では、数え切れないほど沢山の人の関わった。大学で出会う人はもちろん、お店の店員、タクシーの運転手、デリバリーや宅配便の配達員、旅先で知り合った人など。こう羅列すると、日本での日常生活で出会う人と何ら変わりはないように思われる。しかし、中国で出会った彼らは、常に私に新しい学びをくれた。なぜなら、彼らはいつも本音で私とぶつかってきたからだ。私は彼らとよく対話した。彼らは、立場が先生であろうが店員であろうが運転手であろうが、思ったことや感じたことは、何でも言葉にする。私が生徒だから客だからといって、躊躇することはない。その発言は時によって私を喜ばせることも怒らせることもあったけれど、本音と建前がはっきり分かれている日本で育ってきた私は、その飾らないやりとりにもぬくもりを感じた。また、それによって彼らがどんな肩書を持っていても、皆それぞれ一人の”人”なのだということを強く認識させられた。

中国での日々の中で、日本では考えられないようなトラブルがよく発生した。度重なる想定外の事態に心が擦り切れそうになることもあったが、それでも慣れて余裕が出てくると状況を楽しめるようになった。融通の利く場面が多かったのも、ものごとに可能性を感じて面白かったし、言語を学ぶモチベーションにもなった。中国語ができればできるほど、自分がより有利な状況になることが多かったからだ。問題を乗り越える度に“生”を実感したし、精神が鍛えられ、タフさが身に付いた。以前の肝の小さい自分とは異なり、何が起きてもどっしり構えられるようになった。私は徐々に、人間らしさとは何かを理解していった。

そうやって、中国からエネルギーのおすそ分けをしてもらいながら、目まぐるしい1年間を終えた。もとは語学の習得と中国社会への理解を深めることが留学の目的だったのが、結果として自己形成も実現するとは、自分でも驚きだ。今となっては、私にとって中国はもはや外国とは思えない場所だ。感じたぬくもりは、ずっと忘れないだろう。濃密な留学生活を終えた今、胸を張って自分の成長を証明できる。ありがとう、中国。

「中国人」とは誰のことか

西柰太郎

「中国人は皆が良い人である」というと、それは嘘になるだろう。なぜなら、中国人にも良い人がいれば悪い人もいるからだ。そもそも「中国人」という主語は、漠然とし過ぎている。

ただし、僕があくまで個人的に次のように言うことは嘘にはならないはずだ。つまり「僕がこれまでに会った中国人は皆が良い人である」と。

僕に初めて中国人の友人ができた二〇一一年の話。大学を卒業して就職をしなかった僕は、皆より少し遅い卒業旅行の資金作りのために、運送会社の倉庫でアルバイトをしていた。肉体労働である上に、夜勤ということもあり、職場の雰囲気は殺伐としていた。

職場を統括する社員は、仕事ができる人間を厚遇し、できない人間を冷遇した。休憩時間に雑談をするのは決まってベテラン・アルバイトの中年男性たち。若い人たちは各々に仮眠を取ったり、携帯電話を操作したりと、そこで友情が芽生える気配はこれっぽっちもなかった。

そんな職場に白さんがやってきたのは、僕がその職場を辞める一週間前だった。人目を引く金色の髪は長く伸び、前髪は目にかかっている。いかにも垢抜けない大学生といった風貌だった。

白さんは煙草を片手に休憩室の前でキョロキョロとしていたので、僕は喫煙室の場所を教えてあげた。すると、彼は「ありがとう」と言って喫煙室に向かった。その一言を聞いて、すぐに彼が日本人ではないことがわかった。僕もトイレを済ませてから喫煙室に行った。入室すると、彼はすぐに僕を見つけた。再び話しかけるつもりはなかったのだけど、目が合ってしまったので僕は白さんの隣で煙草を吸うことになった。

「年齢は？」「出身は？」「大学は？」

はじめこそぎこちない会話だったけれど、年齢が同じということもあり、その日のうちに僕たちはすっかり意気投合した。実際に話してみると、白さんはとても気さくだった。彼は留学のために来日したそうだ。

僕たちは受け持ちの作業スペースが異なったために、毎晩、休憩時間にだけ顔を合わせた。出会って数回目には連絡先を交換し、僕がアルバイトを辞めた後も連絡を取り合った。

ある時、白さんから「美味しい寿司が食べたい」というメールが来た。僕は、せっかく日本に来たのだから、本当に美味しい寿司を食べてもらおうと、白さんを案内することにした。とはいっても、僕はフリーターで白さんは学生。高級店になんて行ける余裕はなかった。頭を悩ませ、友人たちに相談をした結果、せめてもの思いでこれまでに僕が食べたなかで一番の店に行くことにした。

当日、僕たちは互いの母国についてあれこれと語りながら、次から次に寿司を注文した。会計の段になって、僕が財布からお金を取り出そうとすると、白さんは頑なにそれを拒んだ。今日はわざわざお店を探して付き合ってくれたのだから、自分が出すというのだ。そして、笑顔で「これが中国人の気持ちの表し方だ」と言った。

僕は、同じ年齢の、しかも同じ時給だっただろう彼からご馳走になって良いものかと躊躇った。しかし、今回はご馳走になっておこうと思った。そして、先に店の外に出て、支払いを終えた彼が出てくるなり深々とお辞儀をして礼を言った。

白さんの行いは、中国では取るに足らないことなのかもしれない。そのあたりの事情は僕にはわからない。あるいは、日本でもお礼の代わりにご馳走するということはよくあることだ。だけど、それなりに頭を悩ませた僕の思いを、しっかりとわかってくれたように思えて僕は純粋に嬉しかった。

僕のまわりにも時々、中国人のことを悪く言う日本人がいる。だけど、彼らの言葉は誰か特定の中国人に向けられたものではなく、あくまで「中国人」という漠然としたイメージに向けられているように思う。

僕には、その後も数人の中国人の友人ができた。僕が「中国人」と聞いて連想するのは明確な「顔」を持つ彼らのことだ。そして白さんをはじめとした彼らは皆、とても良い人たちなのだ。

私の小さな国際交流

大木麻由

私の中国に対するイメージは、あまり良いものではなかった。テレビや新聞で話題になるのは、他

国のキャラクターの盗作問題や爆買いの様子が多く、近くて遠い国という印象だった。しかし、高校に入学して出会った中国人の友人が、私の気持ちを変えてくれた。

彼女は両親の仕事の都合で来日し、2年目になるところだった。明るく、誰に対しても笑顔で平等に接し、毎日一生懸命に日本語を勉強していた。そんな姿を見ていた私は、もっと彼女のことも、彼女の国のことも知りたいと思うようになった。

日本では、たとえ親密な仲であっても、相手を傷つけないような遠回しな表現を選ぶことが多い。私は彼女の率直な物言いに圧倒され、自分の意見が言えないこともあった。その度に彼女は、

「私は大丈夫だから。日本の文化も理解しているけれど、もっと自信を持って自分の意見をはっきり言って。」

と言ってくれた。私は少しずつ自分の考えを伝えられるようになった。私達の距離は次第に縮まっていった。彼女は、

「お互いの国の文化や歴史を知り、理解し合うことで真の友人になれると思う。」

とも言ってくれた。そして、来日するまでのこと、中国での生活、いろいろな話を話してくれた。私も中国に対して抱いていたイメージを正直に伝えた。しかし、彼女に出会い、もっと中国のことを知りたくなったと話す、

「日本に来て良かった。」

と言ってくれた。

彼女と出会わなければ、私の中国に対するイメージは変わらないままだっただろう。中国語や中国の文化に興味を持つこともなかったと思う。テレビやインターネットの情報は、その国のほんの一部分にすぎない。実際にその国の人々と会い、心を開いて言葉を交わすことで、その国の本当の姿を理解することができることを彼女は教えてくれた。例えば、日本には「親しき仲にも礼儀あり」という言葉がある。親しい間柄でも「ありがとう」や「お待たせしました」の一言を添えるのはよくあることだ。一方、中国では、1度心から信頼した相手に対しては、いちいち気を使わない。私が習慣で口にしてしまうと、彼女は、「遠い人のような気持ちになる。」

と言う。国が違うと習慣や文化も違う。彼女を通して中国の事を知るとともに、日本の事を改めて考える機会にもなった。

言葉も分からない異文化の国で生活をするの大変さも、彼女を見ていて感じた。彼女は来日してから1度も日本の病院へ行ったことがないと言う。

「虫歯が辛いので歯医者に行きたい。でも日本語で上手く説明できないから、予約ができない。」

と悩みを打ち明けてくれた。私は母に相談して学校近くの病院を探し、彼女の病院に付き添った。受付では、問診票の日本語を中国語に訳して準備して下さっていて、彼女はその対応に感動していた。診察室では、自動で水がコップに注がれる様子に目を丸くして驚いていた。私達にとっては当たり前のことも、国が違うと当たり前ではないと感じた。学校での授業も、カタカナに苦勞していた。先生方の話すスピードについていくのも大変そうだった。そのため、私は彼女が理解できるように簡単な日本語を選び、先生の話を変えた。生活面で悩む彼女を見るたびに、もし私が中国語を話すことができたなら、もっと力になれるのではないかと考えることもあった。

私は、今年の春から大学生となり、中国語を学んでいる。勉強していて、難しいと感じることが多い。彼女にそう伝えると、発音を録音してスマートフォンに送ってくれるなど、親身になって相談に乗ってくれている。いつか彼女の故郷を訪れ、現地の人々と言葉を交わしてみたい。また、現在日本では、多くの中国人が生活している。彼等の暮らしのサポートもできればと思う。彼女と過ごした高校3年間は、私にとってかけがえのないものとなった。私達のような小さな出会いの積み重ねが、未来の中国と日本を繋げる1歩になると思う。

中国のマナー・モラルと先入観

池田修一

「中国人はマナーが悪い。」と、メディアでは伝えられている。私の父親も、中国人には否定的だ。訪日している中国人の行動がニュースで問題視されると、すぐに「これだから、中国人は」と言い切ってしまう。そこで、私は、言い切ってしまう父に疑問を抱いき、日本人が、中国人にマナーやモラルを問いかける根拠があるのかを調べてみたことがある。

日本の「電車」、一つを取り上げても、昔と今では大いに異なった。昔の日本の列車の中は、床はきれいで、優先席などが確保されている空間ではなかった。当初は、今とは比べ物にならないくらい、電車内のマナーとモラルは欠如していたという。例えば、飲食をした後に出たごみは列車内に散らかっていたし、たんや唾を列車内に吐き捨てる人もいた。果ては、ごみを列車の窓の外から捨てて、当時の駅員などがけがをしてしまうこともあったという。

先に述べた例は、戦前・戦後直後の話である。それから、環境汚染対策や1964年の東京オリンピックの開催などに伴って、電車だけでなく、街なども対象に、マナーやモラルが今の日本のように変わっていった。

しかし、本当に、マナーやモラルは守られているのだろうか。確かに、今の日本の電車内の床は散らかっていないし、東日本大震災や今年開催されたFIFAワールドカップでは、日本人のマナーやモラルが世界で称賛されている。けれども、私は、戦前から今までの、大量の時間をかけても、変わり切れていないと思う。

私が電車で移動していた時のことだ。車内は混みあっていて、私は、吊革に掴まって、立っていた。しばらくしてから、5つ先くらいの席が空いた。空いた席の目の前には、中国人が立っていた。しかし、その中国人は、席に座らなかった。そして、その中国人は、自身の斜め後ろに立っていたご高齢者の肩をたたいて、席に座るように促していた。中国人は、日本語が分からなかったせいか、言葉は話していなかったが、手招きやジェスチャーなどを理解したご高齢者が喜んで席に座って、中国人にお礼を言っていた。もう一つ、これも電車内の出来事であるが、その時も車内は混みあっていて、座れる席はなかった。しばらくしてから、中国人3人が入ってきた。席がなかったのも、その3人も吊革に掴まって、立っていた。しかし、1人の中国人は明らかに大きな妊婦だった。気づいているのか、そうでないのかは分からなかったが、席に座っている人たちは、席を譲ろうとしない。3駅ほどで、中国人の3人は降りられたけれども、妊婦は立っているのも辛かっただろうなと思った。

私が経験した二つの例は、電車内の「席」に関することだったが、それだけではなく、ペットボトルのごみを置いていく日本人もいれば、線路にたんや唾を吐いていく日本人も見かけることがある。

このように、今の日本人だって、マナーやモラルを守っているとは、言い難い。なのに、どうして、訪日している中国人を否定できるのか。日本人が、日本でのマナーなどを棚に上げている間に、訪日する中国人のマナーは向上していく。そうしたら、今度は、電車内にごみを捨てる日本人や電車の席が必要な人に席を譲ろうとしない日本人などが問題視されるだろう。

もちろん、私も、中国人のマナーなどを問題視することはできない。先の例で言えば、中国人の妊婦の方に、席を譲るように促すこともできたからである。

「中国人だから、マナーやモラルが悪い」などという先入観は、まるで日本のマナーやモラルが完璧のようだから、間違っていると思う。むしろ、日々、中国人のマナーやモラルが向上していることに、危機感を抱き、「日本は、自分たちのことを棚に上げている」と思われぬように、精進していくべきと、中国人との関わりの中で考えさせられた。

呉下の阿蒙にあらず

山本勝巳

中国は恐ろしい国——日本の対中報道は経済発展を背景に、野心的な外交政策や強硬姿勢、人々のマナーの悪さを指摘するだけで、ネガティブな印象しか与えない。一方で、中国人観光客の日本訪問数は昨年700万人を突破し、右肩上がりの状態だ。交流の最前線は政治・

経済から離れ、私達の身近な所まで迫って来ている。中国人を職場や学校、観光地で見た事や接した事が一度もないという人を探す方が困難な時代になった。

隣国の恐ろしい国から押し寄せる人々。「お金さえ落としてくれればいい」このような安易な考えで相対してはいないだろうか。また、日本の価値観を必要以上に押し付けたりしてはいないだろうか。一方通行な思惑ではなく、歩みよる姿勢、「変わる」姿を打ち出さなければならない。

「変わる」と言う言葉を聞くと、一人の中国人留学生・楊さんが思い出される。私は大学職員として留学生の対応をしていたが、「90後」と呼ばれる二十代の若者が、紆余曲折しながら、日本生活に適応していく姿を多々見て来た。その中でも彼女が私に与えてくれた思い出は印象深い。

出逢いは最悪と言っていい。入学試験の際、試験教室は入室後、携帯電話の使用は禁止なのだが、有ろうことか教室内の写真を撮影し、SNSにアップしたからだ。偶然、私が投稿を発見し、削除を要請。「試験中は使っていない」と主張し、思い出を消したくないと躊躇う彼女を強く指導した事を覚えている。

その後、入学したものの講義はサボり気味で、学内での友人関係もうまく言っているように見受けられなかった。思えば最初の印象が悪かったせいで、私や担任の先生も含めて、厳しく彼女に接しており、日本語がまだ上手く話せない劣等感も手伝って、学校が楽しくなかったのだと思う。

転機は彼女が入院した事だった。夜中に腹痛を訴え、緊急搬送されたためだ。連絡を受け、慌てて病院対応に駆け付け、医者から検査の説明や治療計画書、入院での決まり事を辞書片手に一生懸命通訳した。検査の結果、命に別状がない事が解り、結果を伝えるため、ベッドに横たわる彼女に目をやると、泣きそうな顔でこちらを見ていた。

理由を聞くと「山本さんがこんなに自分を心配してくれるとは思わなかった」との答えが返ってきた。堰を切ったように、日本に来てから受けたカルチャーショックも含めて、自身の体験を語りだした楊さん。彼女の心の声に耳を傾けながら、思えばお互い建前ばかりを主張し、厳しく接した本音が伝わっていなかったのだと思い、心の中で詫言った。

退院後も講義を欠席しがちであったが、それまで私を避けるような態度から、自ら欠席した理由を説明しに来てくれるようになった。心なしか笑顔が増え、次第に友人も出来て行った。翌年の4月。楊さんが先頭に立ち、留学生達を引き連れて「祝你生日快乐」と、私の誕生日を大学で祝ってくれた。嬉しくもあり、気恥ずかしかった事を今でも鮮明に覚えている。

今年の4月。私は大学を辞めて中国で日本語教師になる事を彼女に告げた。翌日、楊さんは授業が始まる1時間前に来て、学習スペースで予習をしていた。声をかけると、「もう昔の私じゃないから」と胸を張って答えてくれた。私が故事『呉下の阿蒙』の話をするので、「3年かかったけど、山本さんのおかげで変わる事ができた、ありがとう」と笑顔で話す彼女。私は溢れる涙を堪える事で一杯一杯になった。

この後、別の留学生から旅立つ私を心配させたくないから、強がって言っていた事を知った。人が人を想い、気遣う姿に国境はなく。90後の若者だから価値観が相容れないといった、先入観が生む誤解があったと思う。感謝の気持ちを不器用でも構わない、素直に伝える事で「変わる」関係がある事を彼女から学んだ。邪魔なプライドは捨て去ればいいと。日中関係も同じだと思う。日本に来る中国人を括目して相待つべし、新しい日中関係は過去には無く、目の前に来ているのだから。